

学校保健

THE SCHOOL HEALTH No.180

(財)日本学校保健会

生涯にわたる
健康な生活をめざして
—自から進んで健康な
ライフスタイルを
確立するこどもの育成—

第39回全国学校保健研究大会の主題

年頭所感



(財)日本学校保健会 会長 村瀬敏郎

平成2年という新しい年を迎え、心をあらたにして学校保健の課題に取り組みたいと思います。

21世紀を目前にひかえ、最大のキーワードは高齢化社会の到来であります。65才以上人口が日本国民の20%近くを占めるといわれる社会では、若年世代に大きな負担がかかるものと思われまます。

それは巷間問題視されるような経済的側面よりも、若年層と老人の間に横たわる精神的確執に比重がかかることになりましよう。

次の世代を担う青少年の育成は学校保健担当者の役割であります。来るべき社会の変貌に対応できる心豊かな若年世代を生み出すことこそ我々の使命といえましよう。

本年度の学校保健研究大会は沖縄県の担当で開催される予定であります。それまでに当面する問題解決の研究と実践に努め、皆様とともに、ご活躍の成果をお話し合いできることを期待して、年頭のご挨拶と致します。



90年代の夜明け

撮影 石川 行男

目次

座談会 これからの 学校保健センター的 事業に望む	… 2～7
平成元年度の叙勲と表彰	… 8～9
学校保健研究大会の 特別講演抄録	… 10

新春座談会

これからの学校保健センター的事業に望む



■ 出席者 ■

司会	日本学校保健会専務理事	和久井健三
	同 常務理事	下田 巧
	国立公衆衛生院 院長	高石 昌弘
	日本体育大学 教授	吉田瑩一郎
	前文部省体育局体育官	
	前日本学校保健会事務局長	石井 宗一

センター的事業の概要

和久井 会報編集委員会から、学校保健会と、学校保健センター的事業との関係が、一般に十分認識されていないようなので、その点を含めて標題のテーマで話をしたい、との依頼があった。センター的事業というのは、保健会の中の一つの事業である。この点に詳しい石井先生から、過去を振り返ってお話いただきたい。

石井 昭和43年に文部大臣から「児童・生徒の健康の保持増進に関する施策について」健康体育審議会に諮問された。そして、審議結果を47年文部大臣に答申した。その答申の中の施策の一つとして、「学校保健の重要問題に関し、調査研究指導の役割りをもつ学校保健センター的な機関の設置」について述べられている。

このセンター的機関を国が直接かかわるとむづか

しいこともあり、同じ目的をもった日本学校保健会に委託することとなった。そこで保健会の事業として全国学校保健研究大会などの一般的事業とは別にセンター的事業を48年以來、国庫の補助金を得て行ってきた。

和久井 48年以來の事業ということで、もう15年たったわけだが、吉田先生から補足することは。

吉田 本来、センター的機関として、学校保健のための調査研究、相談や研修などを行う機関が望まれていたわけだ。しかし、そのためには予算や敷地などの問題もあり、国ではできなかった。そこで、47年答申の中の8項目（①内外の資料収集、②体力疾病など健康に関する資料、③健康度の測定と評価、④環境と学習能率、⑤地域と子どもの健康、⑥児童・生徒の発育と特異性、⑦障害をもつ子への配慮と相談、⑧学校保健推進の留意事項）ぐらいのことが、センター的役割りとして、建物はないけれど、(財)日本学校保健会にふさわしい仕事としてお願いしている。

その後、大へん精力的に活動し、数々の成果をあげている。文部省に長くいた者として感謝申し上げる。

和久井 お話のような経過で事業を行ってきたわけだが、その事業は、普及指導事業、調査研究事業、健康増進事業の三つに分けて行われてきた。それらについて、良かったこと、不十分なことなど反省をこめて、下田先生からどうぞ。

下田 たしかに多くの人は、センター的事業と保健

会の事業と、どう違うのか、という疑問をもつのも、もっともだと思う。このことは事業内容と予算上からの区分からのことと思う。しかし、最近では研究内容について反省すべきことがあるかと思う。

和久井 これについて吉田先生何かございませんか。

吉田 先ほど石井先生がいわれた答申のことだが、その基本理念の一つは、学校保健の普及充実、二つには内外の資料収集、整理、保存、提供などがある。また一方では、学校保健の広報資料として、図書や参考資料の発行がある。これらはセンター的の事業の中の調査研究事業の成果として、現場での実践活動に役立っている。それは、大学などではできない研究が行われ、現場での実践に役立つ情報として提供されている。

さらに、学校保健に関する研究協議会、職域別の研修会がある。これなどは組織的にいうと普及指導事業が受け皿になっていると考えられる。この他にも多くの仕事があるが、環境衛生と児童・生徒の学習と健康に関する調査研究とか、地域社会と児童・生徒の健康に関する調査、これには公害問題もふくまれており、当時の社会環境も関連したことであった。

一番大きかった問題は、児童・生徒の発達段階において、注目すべき疾病異常、その他、心身の健康上の問題、動向の特異性などに関する調査研究、これには、心臓・腎臓・ぜん息などの呼吸器系、肥満や、情緒障害などと、継続した調査研究活動は、種々の問題を先取りして行ってきた事業で、その成果は多大なものであった。

和久井 高石先生はいろんな委員会に長く関係されておられたので、このことについてご追加を。

高石 昭和48年の最初の委員会（健康度評価方法委員会）では、健康診断項目の中に運動機能に関するものを入れるか、どうかで大へん議論があった。そのあと昭和50年に健康診断調査研究委員会が設置され委員長を3年つとめた。

この事業の最初のステージでは、テーマによって長い間つづく委員会があったが、大体一つのテーマについて3年でまとめていく、ということが慣行になってきた。このことはいいことだと思っている。1年目に問題を把握し、2年目に資料の検討をし3年目にまとめるのが普通一般でも行われているからだ。そんなわけで、順次いろんなテーマが取り入れられて進んでいるセンター的の事業は、多くの分野に貢献してきたと考えている。

センター的の事業の実績について

和久井 いままで多くの出版物や、資料の冊子を刊

行したが、それらについて石井先生から説明を。

石井 15年間の出版図書は53種類ある。頒布数は数10万冊となる。例えば63年度に無料で配布したものが3万6千冊、有料のものが1万3千冊であった。これだけでも5万冊近い数である。

もっと凄いと思うのは、この15年間に委員をされてこの事業に携わってくれた先生が800人近くいることである。この方たちが親近感をもって、学校保健に目を向けられたということはたいへん力強いことであった。

私も長い間、事務局長をやったが、63年度は47都道府県の加盟団体全部が、これらの図書を購入し学校保健の普及に努められたことは素晴らしいことだと考えている。

高石 それに関連しつけ加えたい。あるテーマができて、何人かの専門家の先生方が委員として参画する。そうすると、いままで学校保健について直接にはあまり関係のなかった先生でも、委員会で他の先生方と意見を交換しているうちに、学校保健のことについてたいへん前向きな姿勢になっていく。このことは、学校保健の輪を広げていくという意味で、たいへん良いことだと思う。

和久井 センター的の事業は国の費用で仕事をしているが、どのくらいか。

石井 調べてみると、いままで8億8千万円だった。最初の年は2千万円から始まり、多い年には8千万円だったこともある。

吉田 15年間だから8億円は多くないと思う。全国の先生方が安い車代で、ボランティアの形で一生懸命にやってこられた。これも学校保健会だからできたことだと思う。これは役所や単なる民間ではできないことだ。

それぞれの分野で、第一人者の先生方がここに結集したことは驚異的なことと思ひ、感謝している。

石井 私は多くの委員会にほとんど出席した。多いときは年間150回ぐらい委員会が開かれている。出席される委員の先生方は、センター的の事業に関係していることに誇りを感じておられる。そのことがパワーを生みだしているのだと思う。

この15年間の委員の先生方の力を、現場へフィードバックさせることが重要なことだ。

和久井 地方から出席される委員の数を増やして勉強、研究の輪を拡げていくのも大切なことだ。以上



和久井健三専務理事

でセンター的事業の役割りが理解されたことと思う。

下田 要は国の委託機関ということでしょう。

石井 センター的事業は、全国の保健協議大会や各ブロック、都道府県の大会などの活性化に役立ったことと思う。

この事業を導入、推進された立役者だった小栗先生（前専務理事・現顧問）は、「センター的事業は学校保健のための学問・研究を整理して、現場が実際に使いやすいものにして紹介することだ」と、ことあるごとに強調されていた。

下田 研究の中には、短期間に結論のでないものもあったように思う。例えば健康度、健康診断の委員会はそのよい例だったと思う。また、別の点から、こうした問題こそ研究課題としてふさわしい、という方がいるかも知れない。

一方、研究課題で結果のでたものが現場に反映しているか、という点になると、いま一つ十分とはいえない面もある。成果と現場の結びつき、という課題が残っていると思う。

各委員会の仕事について

和久井 普及指導委員会の中には、普及小委員会、指導小委員会、資料小委員会、海外小委員会の4つがある。このあり方や問題について。

下田 普及指導というのは、センター的事業の成果の普及指導なのか、学校保健上必要な事項の普及指導なのか、についての問題があるだろう。

学校保健上の必要なことの普及なら、前々からも本会の一般事業として出版などを行っている。現在の委員会は主としてセンター的事業の報告会に重点をおいている。報告会は1日間で

1年分の報告を行うので僅かの時間しかない。また出席者は伝達講習をしてくれればいいが、その保障はない。そこらへんに反省の要がある。

それから、資料委員会が必要な資料を作成し提供している。しかし、出版とのからみがあり十分に活用されていないうらみがある。今後、普及活動をどうするか反省しているところだ。

和久井 この中で一番大事な小委員会だが、小林登先生の関係で臨教審への対応についてたいへん活動していただいた。高石先生そのへんを。

高石 最も基本的な論議をしたように思う。いまもつづいているが、健康教育についての考え方、学校

保健のあり方について、基本的なことを議論することは本当に大切だ。

和久井 それぞれの委員会が資料を作成しているので、資料小委員会は開店休業の状態である。その必要性についてはどうだろうか。

石井 下田先生がご苦労された委員会で、各委員会で作られた資料が、現場で使いやすいものかどうか。図書として出版することが適当かどうかなどを検討する機能をもっていた。

実際に腎臓疾患の報告書は専門性が強すぎて読んでもわからなかった。下田先生にチェックしていただき使いやすくなったこともある。

下田 そんなこともあり「学校保健の動向」も、始まりの2年間はセンター的事業でやっていたが、どうもうまくいかないの、一般事業に移して10年を経過しているが、次第に出版部数が増加している。

和久井 海外レポートは詫間先生のところでご苦労されており、年3回発行されているが、たいへん好評のようだ。

つぎに調査研究事業について、一般論としてどうあるべきか、という点でどうぞ。

下田 テーマ委員会というのを設置して、12月ごろまでに来年度のテーマ案を作る。案ができた時点で文部省とで相談する。文部省にもいろんな問題がでると思う。現場からもテーマを吸い上げていく委員会が欲しい。そうすると意欲もでてくるだろう。

吉田 センター的事業は、やはり当面の課題は何か、という各現場でのニーズと、先ほど話のあった行政のニーズとの両方からみて、その最大公約数を求めていくことだ。それをどの委員会が受持つかであるう。

下田 秋に評議員会があるので、研究テーマを求めておいて…。

吉田 協議大会などでテーマを話し合ってもらうのも一方法だと思う。

石井 この15年間、児童・生徒の発達から始まって調査研究はほとんどのことを網羅した感じだ。

下田 15年もたつと、現在、もう一度、原点に戻って考え直すのも一案では…。

吉田 近視をめぐる眼の問題もその一つのように思われる。

高石 世の中は常に動いているから、テーマの選択についてはクールな目で見て、しっかり検討していかないと新しい時代に対応できない。これは一般論だが…。

和久井 つぎの健康増進事業については、テーマを作り都道府県へ仕事を委託するわけだが、現場での問題点についてはどうか。



下田 巧常務理事

下田 何としても、研究成果が現場の学校で活用していただくように努力することと思う。

石井 この健康増進事業は53年から始まったが、異質なものが入ってきた感じだった。少し性格が違うものと考えられるが…。

下田 しかし、いまは立派なセンター的の事業の一つになった。

吉田 本来は行政のやるべきことだったかも知れない。しかし、学校保健推進のためだから、とって全て上からモデル地区を作って始めるということはいへんむずかしい問題もある。そこでセンター的の事業に入れたわけだ。

都道府県の学校保健活動を活性化する上で意味のある事業と考えられる。掘り起こしができるし、日本学校保健会と都道府県とのつながりができる、という意味でも好ましいことだ。

和久井 この事業は都道府県へ委託して仕事とするわけだが、好ましくないという点はないだろうか。

吉田 各都道府県の事務局の機構が充実していないと、なかなかお世話がしにくいということもあるようだ。しかし、実際に委託を受けたところはたいへん喜んでもらっている。大事なことは、あがってきた成果をうまくまとめて、整理して、また現場に返していく、ということが大切なことだ。

そのいい例が地域学校保健委員会推進事業だと思う。ぜひ物にしたいと願っている。これは行政的にはできにくい問題だ。衆知を集めて実践しやすい方法を練ってもらいたい。

指導要領でも「開かれた学校の促進」ということがいま大きな課題となっている。その意味でも何とかうまく学校保健委員会が機能してもらえないものかと願っている。

石井 委託事業は53年から始まったが、政令都市を入れると加盟57団体すべてがやったと思う。

下田 この仕事も、もうしばらくすると根づく問題と思う。何とか現場も意識を新たにしてもらいたいと思う。

センター的の事業に望むもの

和久井 いままで反省をこめてお話をいただいたが、これからセンター的の事業に何を望むか、つぎに報告会はどうあるべきか、などをお話いただきたい。

吉田 センター的の事業のテーマについては、現在行われているものを見ても、いずれも現場と行政のデマンドを考えて設定されている。これからは教育面からの視点で、教育課程の改訂の関係もあり、文部省と連携の上で現場を刺戟するようなテーマが必要となるだろう。

中学校については保健指導委員会がまともに入っており、10年、15年ものものが期待されている。高校も改訂があった。小学校も手引書が作られると思うが、それらにともなう実践に役立つものが必要だと思う。

健康診断調査委員会が現在どのような進行状況にあるのか知らないが、早く結論をだして、行政の検討課題に乗るようにされるといい。もう一つは、成果のまとめと普及のことだ。都道府県へいかにフィードバックするかが課題だ。

高石 吉田先生のお話につけている。ほんとうに2・3年先のことを考えた場合、健康教育実践につながるものが必要だ。教育に立ち入ることは行政としてむずかしい、という話も聞いたが、教育面で現場につながるテーマが欲しい。

健康診断については、いろんなテーマや、個々の改訂の中で、生活行動がらみのことなど大きくとり上げられてきている。この点については健康教育関係の手引書作成委員会の江口先生がお世話されていることと思う。しかし、手引書のみにとらわれないで、改訂にかかわることもとり入れていかなければならないだろう。

それも健康は自分で創りあげるのだ、という生活行動のことももちろんだが、一方、環境問題のことも子どものうちから理解させておかなければならない問題だ。いま環境問題は地球規模の課題となっている。学校保健の分野から外れるかも知れないが、社会の義務、責任といったようなことも、子ども達にわからせたい。個人個人の努力だけではなく、小さいときから社会の連帯感によって、良い環境を作るのだということを教えていきたい。

WHOの来年のスローガンは地球環境のことだ。地球というかけがえのない惑星、そして健康を考えると、地球規模で考えなさい。行動はそれぞれの地域特性で進めなさい、という意味のスローガンだ。

私の専門の公衆衛生という立場からも、結局は教育のレベルにもどってきてしまふ。エイズのような新しい問題も、やはり教育になってしまふ。

いつも健康のことを第一義的にとりあげ、これからどうするかを考えることのできる子どもにしていくことが必要だ。そして、遅れている国には卒先してでいき、将来リーダーとなれるような子どもを



高石昌弘先生

育てるべきだと考える。

吉田 文部省でやるのには限界がある。それを補うものや適切な事例をとりあげていくことは必要だと思う。

下田 健康観察、態度観察などは、こういうときはこうだ、という実際的な研究が必要と思う。

高石 先ほど3年ぐらいでまとめることはいいことだ、と言ったが、時代の変化につれて、それでは突っ込めないものもある。同じテーマでも現場につながる視点で再検討することは大切だ。

下田 15年もたつと健康度も別の角度から検討する要があろうか…。

吉田 実は幼稚園の保健指導委員会があつて4年ほどつづけられた。それはそれなりの成果を上げたが25年ぶりに教育要領が改訂された。文部省の初中局でもやるかも知れないが、健康領域を中心とした指導の指針になるものを作って、幼稚園という根っ子のところを再度取り上げたいような気がする。

石井 健康教育を教育課程の中に入れるのには、どうしたらいいか。どの学校でも学校の目標に健康の増進ということを唱っているが、教職員の組織活動、教育体系の中で、竜頭蛇尾になり勝ちな学校経営になっているような気がする。

入学式や卒業式には、皆さん健康は大切ですよというが、中間では健康をとり上げる校長さんが少ないのではなかろうか。

いま一つ、学校保健をやったら、こんなにいい学校になったということを紹介する委員会があつてもいいのではないか。学校保健が学習活動と密着していると、種々のことが解消できるのだということが、学校経営の中から体系的にまとめる委員会を作れないだろうか。

目的は同じにしているが、健康教育が全体と部分の中で処理されている体系はできないものか。

吉田 全国的に成果を評価されている学校を見ると、いまのお話のようなことが実感できる。

石井 いまは皆、合理的になってきていて、余計なことをやらなくなつてきている。もっといって、教育課程の中で学校保健委員会とか、学校保健活動を教育活動として行う、としてあるが、特活の時間とか、教科の中で、どうして、どんな



吉田瑩一郎先生

ことをやるのか、明確でない。基本法で大目標を掲げているのだから、保健活動の実際を具体的に示せ

ば説得力があると思う。

和久井 調査研究事業と健康増進事業とあるが、前者の成果を後者へもっていけば一層良くなると思うが。ただ、突然にもっていても委託を受ける方もどうしていいかわからないということもある。3年間の調査研究の結果を十分連絡して、徹底的に実践してみてもどうか。

石井 歯科保健関係はそういうやり方をしている。

下田 実際的なテーマとともに、行政ニーズによるテーマもあるだろう。

高石 たしかに調査研究をした上に行う事業のほうがわかりやすい。

和久井 調査研究で終わってしまったは何にもならない。本格的に健康増進事業にもっていくことに意味がある。

下田 そういうものもなくてはいけないが、全部が全部でなくていいと思う。それには、先ほど吉田先生がいわれた成果を万遍なく普及していくためには報告会の運営の工夫をいかにしていくかが大事なことと思う。

報告会の運営、進行をどうすればいいか

和久井 それでは、その報告会のあり方について反省をこめてお伺いしたい。

吉田 報告会に全国から多勢の人が集ってくれることに驚いている。というのも、各都道府県の保健会関係者の皆さんが、センター的事業に期待が大きいことを裏付けている。参加者が年々増える一方で嬉しいことだ。

全体会と分科会とをもっているが、一日でやるとすると、あの方法以外にはないと思う。

下田 30分早めて9時30分から始めたいが、現状ではむずかしい。

吉田 東京の代々木で開催するとすれば、全国から集る関係で午前10時開会が適当だと思う。

高石 いまの方法でいいと思う。

吉田 予算の制約もあることだ。本来はテーマ別という開催方法もあるが。

和久井 司会者が異論を唱えるようだが、分科会を止めてみてはどうか。分科会にでていると他のいい話が聞けない、という声を聞くが…。

下田 分科会の数に合わせて、各保健会で出席者を選定しているところもあるそうだ。中には教育委員会で援助してないところもあるようだ。

石井 報告会には愛着を感じている。しかし、端的にいうとマンネリ化した、という感じだ。これだけのスタッフ、これだけの資料を集めてやる研究会は他の分野でもなかなか無いと思う。この報告会の持



石井宗一先生

っている意味と、これに携わっている先生方をPRする方法は無いだろうか。

もう一つは全体会議が少し能率主義的になってしまった。もう少し魅力のあるものにできないものかと思う。例えば、著明な権威の先生方ばかりなのに5分から10分程度の時間聞かない。もっと和久井先生のい

うようにじっくり話を聞いてもらえる会にしたい。ダイナミックにして、来て良かったという実感をもった内容に説得力のあるものにしたい。

吉田 私の委員会はいまこんなことをやっているという経過報告のレベルのもの、煮つまってきているものと、何段階かに分けるのもいいと思う。

下田 1年目、2年目、3年目のものがあるのだから、それを分けて考えたい。

石井 成果のでた委員会の意見を聞くことは大切なことだから30分は欲しい。

下田 30分間ほどはセレモニーに必要だし、時間の配分がむずかしくなってくる。

石井 11月ごろから構想をたてて、都道府県へその意志が伝わるように、理事会でもっと検討した体制

作りを望みたい。

下田 11月中に基本的な案ができれば2月の発表会に間に合うと思う。

石井 3年間の委託事業で実績をあげた団体に報告をしてもらうことが良いと思う。

吉田 報告と同時に委員会の中の意見、討論をしてもらうのもいい。

下田 もう一つ事務担当連絡会があるが、そのとき、ほんとはこんなことをしたい、ということをお願いが、これも6~7時間しか時間がない。

吉田 なるべく早い機会にアンケートをしてみてもどうか。

石井 報告会を文部省の共催という形でできないものだろうか。

下田 文部省共催ということだと各都道府県でも、もう少し予算化されて、もう少し時間的に余裕がとれた会になるのだが。

吉田 報告会ではまずいと思う。成果を中心とした研修会ということだったら違ってくると思うのだが。一度じっくり相談を持ちこんでみては…。

和久井 長時間にわたり大へん意義のあるご意見を頂戴することができた。お話を今後の活動に生かしていきたいと思う。感謝申し上げます。

(文責 杉浦 稔)



センター的事業をふり返って

(財)日本学校保健会 顧問(前専務理事) 小 栗 一 好

学校保健センター的事業については文部省の指示に従って保健会内に本事業を担当する学校保健センター的事業企画運営委員会をつくったことから考えると、その実施は保健会にまかされた形のものと思われる。

ところが事業費としての国庫補助金は、毎年文部省が事業計画をつくって予算要求して認められた国費であるため、予算要求時に文部省が示した計画と異なるような事業を保健会が行えば、文部省が責任を問われることとなり、保健会は文部省の信頼をうらぎることとなる。

それをさけるためには、企画運営委員会はたえず文部省と密接な連携をとりながら進めなければならないわけである。昭和48年から63年度まで企画運営委員長を務めた私はそう考えてそのように努めてきたつもりである。

しかし、この15年間私の心の中にいつも消えたことのないものがあつた。それは、保健会として国の学校保健行政に協力することには大賛成であるが、本事業を文部省の計画通りに、文部省の言うがままに手足となって進めるべきものとするのか、それとも実施をまかされたものとして、保健会の考えで最善を尽せばよいものなのか、という迷いであつた。このことについては、独特の人格をもった法人として保健会は文部省とよく話し合う必要があると思う。

* * *

学校保健センター的事業の発足当時から、企画運営委員長として、この事業を進められた小栗先生のコメントを頂いたので、ここに掲げることにした。

(編集委員会)

平成元年度 叙勲・授賞された学校保健の功労者 《 春 》 《 秋 》

◎学 校 医

〈瑞 四〉

武内 博文 (富山県)

〈旭 五〉

桐谷 信雄 (鳥取県) 栗栖 熊雄 (島根県)

日下部明夫 (埼玉県)

〈瑞 五〉

吉田 元昭 (佐賀県) 原 三正 (岡山県)

権守 赳夫 (山梨県) 小林 哲 (群馬県)

杉森 亮 (神奈川県) 佐藤 正夫 (愛知県)

◎学校歯科医

〈旭 五〉

坂本 良作 (高知県) 中根 實 (東京都)

黒瀬 武男 (広島県) 杉村 良雄 (奈良県)

〈瑞 五〉

山口 省吾 (茨城県) 秋田 康夫 (京都府)

大崎 恭 (大阪府) 山田 謙三 (長崎県)

横山 清理 (鹿児島県) 高橋 弘 (青森県)

滝澤 泉 (長野県) 伊保内政一 (岩手県)

◎学校薬剤師

〈瑞 五〉

原田 國高 (東京都)

〈藍 綬〉

西連寺愛憲 (東京都)

◎学 校 医

〈旭 五〉

山口 貞 (宮崎県) 箕浦 通夫 (茨城県)

櫻井 正義 (兵庫県) 大橋 國富 (愛知県)

関本 定雄 (埼玉県)

〈瑞 五〉

鈴木 孝輔 (千葉県) 濱村 篤志 (鹿児島県)

安田 豊登 (広島県) 迫井 忠 (広島県)

寺島 誉 (長野県) 渋谷 尚之 (富山県)

山本 新作 (群馬県) 長田 歌子 (長野県)

◎学校歯科医

〈瑞 四〉

咲間 武夫 (東京都)

〈旭 五〉

吉良 憲夫 (埼玉県) 井上 丈夫 (岩手県)

〈瑞 五〉

兼田 和雄 (石川県) 内川 進 (長崎県)

松生 貞夫 (三重県) 安岡 正 (北海道)

浅井 壽一 (静岡県)

◎学校薬剤師

〈旭 五〉

橋本 祐一 (福岡県)

第38回 全国学校保健研究大会

文部大臣表彰の個人・学校・団体

◎学 校 医 (46名)

新井 孝義 (北海道)	大口 正道 (北海道)	小野 道延 (北海道)	村井 勢 (青森県)
穴戸 鳳悦 (岩手県)	佐藤 潔 (宮城県)	村山 秀雄 (山形県)	藤井 徳藏 (福島県)
渡邊 龍一 (茨城県)	池内 哲 (茨城県)	佐藤 秀 (群馬県)	高木 泰 (埼玉県)
岡野 文雄 (千葉県)	小野 葵子 (東京都)	清水 秀夫 (東京都)	今井 法一 (神奈川県)
田邊 知信 (神奈川県)	中野 潔 (神奈川県)	稲尾善四郎 (富山県)	金戸 芳雄 (石川県)
渡邊 守 (山梨県)	中込 岳夫 (山梨県)	村田 正齊 (岐阜県)	渡邊 岩雄 (静岡県)
鈴木 寛 (愛知県)	渡邊 十郎 (滋賀県)	西 祥太郎 (京都府)	浅野 宜春 (大阪府)
崎谷 文男 (兵庫県)	松尾 準三 (和歌山県)	斯波 正和 (和歌山県)	佐伯 進 (鳥取県)
中島 界祐 (島根県)	大塚 卓 (岡山県)	大西 隆之 (広島県)	末兼 保史 (山口県)
今田 純正 (香川県)	壽美 暢夫 (高知県)	山崎 圖南 (福岡県)	平野 進 (長崎県)
小山 哲男 (熊本県)	伊東 眞純 (大分県)	高橋 正名 (宮崎県)	谷 栄市 (宮崎県)
日高 照男 (鹿児島県)	安座間 廉 (沖縄県)		

◎学校歯科医 (37名)

桑澤 行敏 (北海道)	吉岡 隆一 (青森県)	立花 義康 (青森県)	黒田 亨 (岩手県)
吉中 登 (宮城県)	五味 武一 (秋田県)	立花 武文 (茨城県)	安藤 進 (茨城県)
谷内 浩 (群馬県)	富山 文雄 (埼玉県)	宮本善一郎 (千葉県)	福原修一郎 (東京都)
戸邊 武一 (東京都)	鈴木 登 (東京都)	行木 博男 (神奈川県)	黒木 正直 (富山県)
草薙 雄進 (長野県)	大岩 守 (三重県)	木戸 重昌 (滋賀県)	山口千之介 (大阪府)
澤田 稔 (大阪府)	上村 茂夫 (兵庫県)	榎本 哲夫 (奈良県)	野尻 敏樹 (和歌山県)
坂口 卓彌 (鳥取県)	鐘築 好光 (島根県)	坪井 甫之 (岡山県)	畠山 洸 (広島県)
豊永 英達 (香川県)	依光 皓 (高知県)	山本 康治 (福岡県)	升井健三郎 (福岡県)
諸熊 正武 (長崎県)	溝越 威夫 (長崎県)	伊東 空 (大分県)	楠 誠 (宮崎県)
瀬口 紀夫 (鹿児島県)			

◎学校薬剤師 (11名)

鷺 武 (茨城県)	長野 順一 (栃木県)	渡邊 孝 (千葉県)	安藤 廣彦 (神奈川県)
棚橋 儀弘 (岐阜県)	浅井 賢次 (愛知県)	石川 明生 (愛知県)	吉矢 佑 (大阪府)
高岡 誠二 (兵庫県)	本間 功 (福岡県)	一門 邦彦 (熊本県)	

◎校 長 (6名)

木村 勲 (北海道)	高橋 義明 (青森県)	渡邊 榮一 (栃木県)	藤澤 彰 (福井県)
作田 正雄 (大阪府)	城戸 晃 (福岡県)		

◎保健主事 (2名)

秋田谷 暁 (青森県)	小谷 昌司 (山口県)
-------------	-------------

◎養護教諭 (12名)

鈴木 幸子 (茨城県)	金沢ふじ子 (埼玉県)	田口 富子 (東京都)	細川 百合 (石川県)
河原 通子 (京都府)	山岸似佐美 (京都府)	勝井きみ子 (兵庫県)	神箸 圭子 (奈良県)
唐崎 和子 (広島県)	大場 房江 (高知県)	杉本 花子 (大分県)	喜屋武禮子 (沖縄県)

◎その他 (1名)

吉原 正智 (佐賀県)

◎学 校 (10校)

山形県酒田市立飛鳥小学校	福島県河東町立河東第三小学校	茨城県河内村立金江津小学校
新潟県牧村立牧小学校	長野県望月町立本牧小学校	静岡県浜松市立新津中学校
愛媛県松前町立岡田小学校	愛媛県三間町立成妙小学校	佐賀県玄海町立有浦小学校
沖縄県那覇市立真和志小学校		

◎団 体 (7団体)

茨城県那珂地区学校保健会	群馬県桐生市学校保健会	東京都渋谷区学校保健会
東京都練馬区学校歯科医会	福井県敦賀市学校保健会	京都府宇城久学校保健会
鹿児島県鹿屋市学校保健会		

* 上記の叙勲・表彰された方々について、本会より例年どおり個人には銀盃、学校・団体には記念品代を贈呈しました。

虎の門(3)

運 動 会

「お元気ですか？ 僕は入場行進ではきしゅになり徒競走と火花散る青春(棒たおし)それと選抜リレーに出ます。保健係でゴールメダルを作ります。おひまがあったらみにきてください」都立養護学校高2のS君から、しっかりした字の手紙がきた。学校長の方針で各生徒は恩師に手紙を出す。

当日は曇りの開会式。いた、い

た。誇らし気に旗を掲げている。背は伸びていないが、たくましくなった。声をかけ、しばし話こむ。白い歯がよい。

突然隊列を離れ走り出す子、観客席の恩師を見つけ、入りこんで戻される子。「走る」ということが心障者にとってどんなに大変なことか。でも懸命に走る。ズルはしない。相手をいつまでも待ってや

る。心やさしい解説のアナウンサーの声盛り上げる。

残された機能を維持し、悪化を防ぐ。親や先生方のご苦勞の様子を拝見して、医学の進歩と自分の健康のありがたさ。いずれ高齢化の折、機能障害に陥る可能性を思い、障害者と共に生き、援助のあり方を考えさせられる運動会であった。(松本國夫編集委員)

第39回 学校保健研究大会

特別講演

こどもとおとなの健康教育の起点と戦略

聖路加看護大学学長 日野原 重 明

健康教育の起点は、健康の行動の教育であるべきだが、実際には、知識の伝達に始まり、伝達されたと思えた知識は見事に流産して、知識のこどもであるべき健康行動が生まれえない点に間違いがあることを訴えたい。こどもはおとなから、先生から健康教育を受けているが、今後はこどもがおとなを教育する可能性があり、こどもにどうアプローチすれば、そのようなこどもが育つかといった新戦略を述べたい。

起点とは物事が始まるターミナルである。こどもは人生の旅の起点に立っている。どうすれば目的とする終点、すなわち健康の維持・予防・増進を達成するかである。事実、今、こどもは塾の生活に明け暮れし、健康教育でいえば、挫折をしている状態で成人という駅に乗り換え、そこを起点としていかねばならない。そのような生活では健康が実現されるわけがない。こどもが乗り換えせずに終生を通す態度をし続けて欲しい、これが念願である。人間は単独では存在しない。人間が在るこの環境との調和によって、人間は自ら健やかにすると共に環境を健やかにする、そうゆう使命を自覚しなければならない。

健康というのは、やすらかな存在でなければならない。痛みがある、苦しみがあるとか、具体的問題がないのみでなく、心と体も共に安らかでレベルが高いのを **Health** という。

私達の健康は目に見える健康よりも、目に見えない健康の方が大きな容積をもっている。ドックで調べて何ら問題がなくとも、心に不安な問題をもっている。自分は具合が悪い、勉強もできない不安な状態になる、人の目に見えない不健康 (**Health problem**) が水面下にある。これが健康のイメージである。

新しい健康の概念は、ルネ・デュボスによれば、「変動し続ける環境の中で、人間がどのように変化に対して、自らの心身を適応させ、個人、地域、国家、世界の集団の力でどのような環境を作るかといった

人間と環境のダイナミックな相互作用、調整作業の中に具現されるものが **Health** である」という。日本のみでなく、アフリカの荒れた環境をよりよく作り上げるにはどうしたらよいか、人類が共存しなければならない。私の健康は私だけの健康だけではなく、世界の人々の健康であるという健康意識をこども達にもっているだろうか。健康を分ち合うという教育がされてなければ、作られた健康には魂が入っていない。

健康教育のこどもに必要な条件は、

1. 健康が障害されないように予防する。
2. 自分では何でもなくとも定期的に受診し、病を早期発見すること。
3. 健康増進 **Health promotion** こどもの時から自己の責任感を植えつけるように教育する。

更に戦略として、

1. 自分の行動で自分の健康を作る。
2. その為に必要な **simple** な知識と、ある技術をもてる技をこどもに与える。今迄は知識を教え道具を持たせない。こどもは1時間で正確に血圧を計る素晴らしい素質をもっている。

福澤諭吉は明治11年に教育論を著した、「教えるより習いという諺がある。一家は習慣の学校なり、父母は習慣の教師なり、而して習慣の学校である家庭は教育の学校よりも、更に有力にして人口を総する」とある。家庭の崩壊した所に健かな健康は育たない。モデルがなくしてこどもには教えられない。こどもに医学知識を教えることであったが、命を持つ当人に健康行動の実践を自ら行なわせるようにするのが健康教育のコツである。与えられた健康、環境を感謝し、このような健康を分つのはどのようなしたらよいか、こどもの時から、与える習慣をもたせる。健康教育とは、人間として生きる為の教育で、学校は水を提供し、もっと家庭に目を向けることを考えたい。

(文責 杉下順一郎)

学校環境衛生研究協議会

平成元年度の学校環境衛生研究協議会が、平成元年10月26日・27日の両日、岐阜市民会館を中心にして開催された。

全国の学校保健担当者の指導的役割を果している者の協議会で、約700名が参加した。

第1日目は翌日の部会別研究協議のステップとして、次の講演・講義が行われた。

講演「健康教育と環境教育」

講師 岐阜市立女子短大学長 小瀬 洋喜

講義 1.「学校保健の現状と課題」

講師 文部省体育局健康教育課長 石川 晋

講義 2.「学校環境衛生をめぐる諸問題と活動」

講師 文部省体育局学校健康教育課教科調査官

石川 哲也

講義 3.「学校経営と学校環境衛生活動の展開」

講師 岐阜県瑞浪市立大湫小学校長 安藤 博也

第2日目は幼稚園・小学校部会、中学校部会、高等学校部会、教育委員会部会に別れ、それぞれ熱心に発表協議が行われた。

前号(No.179)の7ページ、全日本よい歯の学校表彰の記事に、文部大臣賞を受賞した福岡県福岡市立美野島小学校のご紹介を落しました。謹んで訂正しお詫び申し上げます。

日本学校保健会だより

平成元年度 全国学校保健協議大会

平成元年度の全国学校保健協議大会は、去る平成元年11月17日(金)の午後4時30分から、水戸市で開催されていた第39回全国学校保健研究大会(16・17日)に引き続いて、同市内の「サンレイク水戸」において開催された。

2日間の研究大会終了後であり、しかも、そのあとにいろいろな計画が考えられていたにもかかわらず、昨年とほぼ同数の140名近い出席者があったことは、この協議大会によせる関心の深さの一端とも受け止められる。

本会としては、この全国からよせられた期待と情熱を尊重し、学校保健の充実推進にむけて全力をあげていきたい。

協議大会は、村瀬本会会長、猪股文部省体育局体育官のあいさつに始まり、議長団に選出された、榊田本会常務理事、伊藤長野県学校保健会長(前年度開催県)、小川茨城県学校保健会長(本年度開催県)、比嘉沖縄県学校保健会長(来年度開催県)の4氏によって運営された。

まず、昭和63年度協議事項の処理に関して、伊藤議長(長野県学校保健会長)から文部省、各加盟団体・都道府県指定都市教育委員会にあてた要望、及び、各加盟団体からの研究課題実施成果などについての概要が等告された。〔各加盟団体からの研究課題に対

する取り組み件数が、年々大きく増加していることに注目したい。(S61 5県、S62 10県、S63 18県2ブロック、H元 18県)〕

次いで本年度協議題の協議に入った。

本年度の協議題の決定にあたっては、昨年度から実施しているように、本協議大会の充実をはかるねらいで学校保健の今日的課題を中心に各ブロックからの協議事項を集約し、該当するブロックの代表から提案理由の説明をもとに、参加者全員で集中的に協議した。

○ 平成元年度 協議題

- ① 学校における健康教育の充実、強化について
 - (1) 健康教育の推進について
 - (2) 児童生徒の疾病に関する事項について
 - (3) 小児成人病対策について
 - (4) 学校保健組織活動の充実と強化について
 - (5) 教職員の学校保健に対する資質の充実強化
 - (6) 保健室の拡充と保健(健康)教室の設置
 - (7) 学校保健と医療情報システム
- ② 各加盟団体提出の協議事項について。

協議は参加者各位の熱心な討議により、あたえられた時間内に非常に充実した掘り下げが行なわれた。

この問題の処理とあわせて、各ブロックから提出された協議事項をふまえた、要望事項、研究課題の作成等については、議長団に一任された。

なお、来年度は11月16日(金)、沖縄県において開催される。

育ちざかりのひと粒!



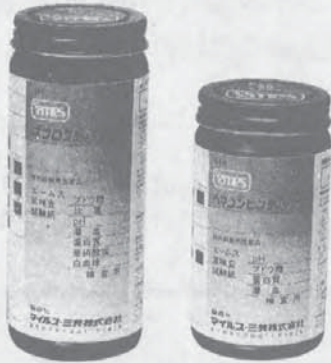
ゼリー状ドロップ剤

歯・骨を丈夫に……

カワイイ肝油ドロップ



河合製薬株式会社 東京都中野区新井2丁目51-8



学童の集団検診にお選びください。

エームスは新しい形で健康をみつめます



尿中白血球反応をプラスしたエームスの尿検査試験紙

エームス尿検査試験紙(尿中pH、ブドウ糖、蛋白質、潜血検査用)

ヘマコンビスティックス

体外診断用医薬品

エームス尿検査試験紙(尿中pH、比重、pH、蛋白質、潜血、白血球検査用)

ネフロスティックス-L

体外診断用医薬品

マイルス・三共株式会社

東京都中央区銀座1丁目9番7号 〒104 ☎(03)567-5511

販売元:

三共株式会社

東京都中央区銀座2丁目7番12号 〒104 ☎(03)562-0411

JU1488S

目の健康と視力 その管理と指導

(財)日本学校保健会 編 ★A5-160頁・定価876円<千260>
目のしくみや動き、近視予防等について、正しい知識と適切な指導・管理が行えるよう、平易に解説した。

貧血と脳貧血 その予防と指導

(財)日本学校保健会 編 ★A5-208頁・定価1,009円<千260>
貧血の症状や調べ方、治療について、専門的、医学的に解説。学校での指導や予防等についても詳しくふれた。

健康障害児の運動指導

(財)日本学校保健会 編 ★A5-182頁・定価1,339円<千260>
従来、取り残されていた健康に障害をもつ児童生徒の運動指導について、人間形成という視点から、より積極的な指導と管理ができるよう専門医学者の衆知を集めて解説した。

※表示の定価は消費税込み価格です。

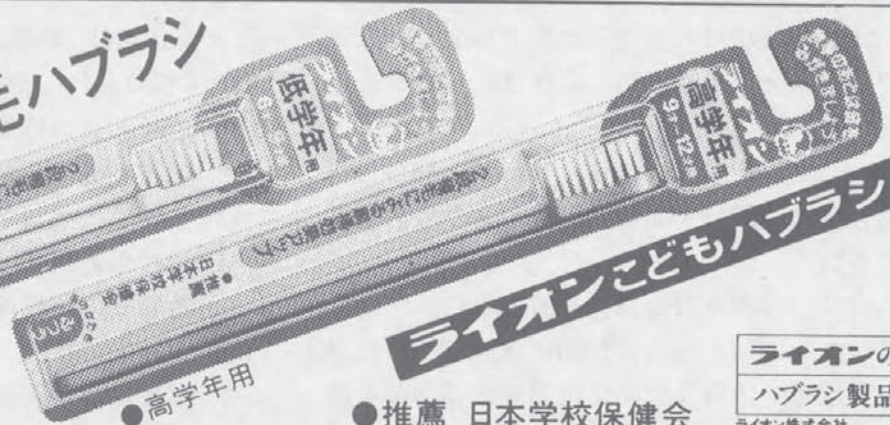


第一法規 〒107 東京都港区南青山2-11-17
☎(03)404-2251/FAX(03)479-1747

子供の歯を考えた

ライオンの2段植毛ハブラシ

●低学年用



●高学年用

●推薦 日本学校保健会

ライオンの
ハブラシ製品
ライオン株式会社

“ふだんの予防で、元気な毎日”まず手洗い!!

殺菌消毒用 シボネット石鹸液 2.0

日本学校保健会推せん No.632

精製ヤシ油を原料にした殺菌、消毒用石鹸液で、手洗いのあといや～な臭い
が残りませんので喜んでお使いいただけます。シャボネット容器に入れ、水で
7~10倍にうすめてお使いください。

サラヤ株式会社 TEL (06)797-2525

東京サラヤ株式会社 TEL (03)769-3131

発行 (財)日本学校保健会 村瀬敏郎 〒105 東京都港区虎ノ門2-3-13 第18森ビル 電話(501)3785・0968 振替口座 東京4-98761

頒価1部100円(送料共)

〈本会報は、拠出金と、本会への(財)日本船舶振興会助成金により作成しました〉